「知ること」から「考えること」への授業作り

岡田真由

1　はじめに

小・中・高等学校すべての学習指導要領に「伝統的な言語文化」が設置された背景として、平成十七年度に行われた高等学校教育課程実施状況調査（「国語総合」）での結果が指摘されている。この調査結果では、「ペーパーテスト調査」において、通過率が設定通過率を下回ると考えられる十二問のうち九問が古典に関する問題であった。また、「読むこと」において、古典の題材では設定通過率を下回る問題数の増加や無解答率の増加など、古典を読み取る力に関しての課題が多く挙げられている。

調査結果の「読むこと（古典）」の分析では、「古典を読むための知識・技能を確実に身に付けさせていくことが望まれるところであるが、訓詁注釈的な古典の授業が古典嫌いの生徒を生み出した轍を踏まないよう、古典を読む意欲をまず高めることが大切である。古典への学習意欲を高める取組みの中で、知識・技能も身に付けさせていくようにしたい。」と述べられている。

2　問題の所在

筆者の問題意識は、中学校から高校、高校から大学への移行期の差をいかに埋めて接続させていくかという点にある。我々高校現場の教員は高校への入口の段階・出口の段階の学力をどのように捉えるべきなのか。力を身に付けさせるための授業のあり方はどのようにあるべきなのかということを考えていきたい。

入口の段階での授業のあり方を考える場合、高校の教員は中学での学びのあり方を把握しておかなければならない。中学校の現状を把握し、高校での指導内容を考えていかなければ移行期の「差」を埋めていくことはできないだろう。例えば、新学習指導要領での指導内容として、次のような意見がある。

「中学校国語科では、古典を原文で読めるようになることが目標ではない。目標は、ひとえに学習者が古典を好きになることである。これを最優先の目標に据えたうえで、古典の作品や古典に関連した近現代の文章などから獲得した知識を、生徒が自らの言語生活に役

立てる姿勢を養いたい。古典嫌いをつくらないためには、生徒がおもしろがるような話題の開発と教材づくりの工夫が欠かせない。また、授業を躍動感と楽しさに満ちたものにしようとすることも重要である。古典の学習を高尚な教養の獲得などと固く考えるのではなく、『古典の学習は楽しい』と感じることができるような工夫を教師自身が楽しめるようでありたい。特に入門期では、ゲームの素材選びなどに古典を使って遊ぶという感覚で、気軽に経験させるとよい。」

「伝統的な言語文化」の入門期の取り扱い方として、とにかく、古典を楽しく、おもしろく感じさせる扱い方がなされるならば、高校での扱い方との差は大きくなる。

高校古典の最終段階である「古典B」の目標は「古典としての古文と漢文を読む能力を養うとともに、ものの見方、感じ方、考え方を広くし、古典についての理解や関心を深めることによって人生を豊かにする態度を育てる」である。「古典を読む能力」を高めることが目標として掲げられ、指導事項として「ア　古典に用いられている語句の意味、用法及び文の構造を理解すること」が示されている。そのような目標に向かい、高校では古典を原文で読む能力を身に付けさせることを行っている。また、出口の段階での大学入試問題に規定される部分もあるため、高校三年次から逆算して、高校一年次の学習内容が決定される。高校一年生の一学期に行われる学習内の多くは「歴史的仮名遣い」「用言の活用」「助動詞」など文法に関わるものや、「辞書の引き方」を教えて「語句の意味」を調べさせ、語訳させるものである。予習の方法を指導し、予習内容を確かめるというやり方で授業を行うため、「訓詁注釈的な授業」となりがちである。この高校の入門期に古典嫌いが増えていくことは、前述の実施状況調査の結果に表れている。

古典の入門期に生徒の興味・関心を高める授業を行うことは大切である。また、古典を読む能力を養うためには、言語体系の知識の定着を図ることも不可欠である。しかし、古典が興味・関心を引くための単なる素材となるだけでは、読む能力は身に付かない。また、知識の詰め込みだけでは、興味・関心は高まらない。高校三年間で言語体系の知識の定着を図りながら、優れたテキストである「言語文化」に出会わせ、読む能力を高めるための方法を模索しなければならない。「読む」行為の中でテキストと向き合い、生徒が思考し、内的な変化を起こし、新しい発見をしていく中で「読む」ことの楽しさは醸成されるのではないだろうか。「読み」、「考える」行為を通じて言語体系を習得していくような授業を行っていく必要がある。

そこで、次のことを取り入れた授業を提案したい

○文脈による語彙獲得の場の設定

○思考の場を取り入れた授業

3　実践報告

「文脈による語彙獲得の場の設定」「思考の場を取り入れた授業」について平成二十四年度の広島県高等学校国語部会の国語科授業改善セミナーに参加し、行った実践について報告する。

（1）国語科授業改善セミナーの目的及び指導案作成

国語科授業改善セミナーの目的は次の通りである。

①生徒に、教材を他者として認識させ、対話を促すことで、思索を深めさせ、知的発見、認識的な更新を重ねていく主体に育てる授業をつくる。

②活用型学力を育成する授業をつくる。

③教科指導力に優れた教員の人材育成。

セミナーでは、これから扱う教材について、各自指導案を作成して持ち寄り、教材ごとにグループで検討し、講師の先生方から指導を受けた。指導内容を踏まえて、作成した指導案、単元の構成に修正を加え、公開授業を行った。指導案、単元構成の修正を行う際、特に意識した指導内容は次の点である。

○「知る」授業から「考える」授業への転換を主題化して教材分析を試みる。

○「考える」授業の核として、語りの主体が作品で提示している問題領域（主体・時代の葛藤＝主体による世界〈人間・社会・自然〉への問いかけ局面）がある。

○単元の中で、第1教材と第2教材、主教材や補助教材などの編成や構成、教師による説明や情報の与え方を工夫する。

○古典世界における筆者や登場人物の葛藤について考える学習展開や学習課題を工夫するとともに、そのことと現代における読者にとっての葛藤とを結び合わせる学習展開や学習課題を工夫する。

（2）単元計画

作品が投げかけている問題領域を捉え、生徒に対して「考える」学習課題を設定するために、教科書掲載部分だけではなく、作品全体の把握をしたうえで、「物思ひ」を考察する単元計画に修正した。全体を修正したが、大きな変更は下線部分である。

ア　セミナー受講前

第1時　全体を通読し、場面を2つに分ける。

第2時　かぐや姫の和歌を読解し、「天の羽衣」に注目して前半部を読む。

第3時　天の羽衣を着る前後のかぐや姫について比較し、変化を読み取る。

第4時　帝の和歌を読解し、「不死の薬」について注目して後半部を読む。

第5時　帝と翁・嫗の行動を比較し、共通点と差異を読み取る。

第6時　前後半を通じて、筆者の人間観について考えさせる。

イ　セミナー受講後

第1時　『竹取物語』についての既有知識と原典の内容を確認し、「天の羽衣」に至るまでの経緯を押さえる。特に5人の貴公子と帝の求婚については、貴公子のそれぞれの性格と帝とかぐや姫の交流を押さえる。

第2時　本文を通読し、場面を二つに分ける。基礎的事項（単語・文法など）を押さえる。

第3時　「天の羽衣」に注目して前半部を読み、天の羽衣を着る前後のかぐや姫の変化（「もの思ひ」がなくなる）から、「人」であることはどういうことかを考えさせる。

第4時　かぐや姫の和歌を読解し、かぐや姫の心情を考えさせる。その際、第1時の帝とかぐや姫の交流について想起させる。

第5時　「不死の薬」に注目して後半部を読み、帝と翁・嫗の様子を整理し、不老不死の薬を飲まなかった理由を考えさせる。その際、帝の和歌を読解し、詠まれている心情を踏まえる。

第6時　前後半を通読して「天人世界」と「人間世界」の比較を行い、「物思ひ」について考えさせる。

（3）**実践内容**

日時：平成二十五年一月二十九日（火）

対象：広島県立広島皆実高等学校　1年3組（男子14名、女子26名）※当日欠席者4名

教材：「天の羽衣」『竹取物語』（「精選国語総合」東京書籍）

公開研究授業に向け、思考の場を取り入れる授業作りとしてペアワークを取り入れた授業を行った。一時間の授業につき、作品の「読み」に関わる質問一つを設定し、ペアワークで話し合い、発表することを単元（全6時）を通じて行った。（第2時を除く。）以下にペアワークで話し合った質問を示す。

【質問事項】

第1時　5人の貴公子と帝との違いは何か。

第3時　『竹取物語』が描いている「人」とはどのようなものか。

第4時　かぐや姫の和歌中の「あはれ」をどのように訳したらよいか。

第5時　帝と翁・嫗が不老不死の薬を飲まなかった理由は何か。

第6時　『竹取物語』は「人間世界」を肯定的に描いているが、自分自身はどう考えるか。

（4）**考察（第4時・第6時）**

ア　文脈による語彙獲得の場の設定について（第4時）

迎えにきた天人に天の羽衣を着せられ、「心異になる」前に、かぐや姫が帝に送った和歌、

「今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける」

について、これまでの文脈を踏まえて「あはれ」をどのように口語訳したらよいかを考えさせた。

「あはれ」は大学入試問題にも頻出の古語である。「あはれ」は用例も多様であり、文脈に応じてその意味が異なってくる。「あはれ」という語自体が持っている幅の広さ、深みや複雑さを、生きた言葉として生徒の中に位置づけさせることが重要である。単語帳の意味を暗記するといった固定的で限定的な意味の習得では、大学入試問

題にも対応できない。

まず、生徒が予習してきている口語訳を複数人に確認すると、だいたい次のようなものであった。

「今はこれまでと、いよいよ天の羽衣を着る時になって、あなたのことをしみじみと思い出します。」

これは辞書的意味として間違っていないが、表現としては薄っぺらく、面白くないので、もっと場面にふさわしい口語訳を考えてみようと生徒に投げかけた。投げかけてから、ペアワークの作業に入る前に、次の2点を確認した。一つめは「和歌にある『今』とはどんな時なのか。」二つめは「帝とかぐや姫の関係はどのようなものだったか。」ということである。生徒達は、ペアワークの話し合いの中で、天の羽衣を着れば、三年もの間、和歌の遣り取りを通して心の交流をはかってきた帝への「思い」を失ってしまうことや、帝との永遠の別れの瞬間であることなどを踏まえながら、「愛しさ」「せつなさ」「やるせなさ」「哀しさ」など、バリエーションのある口語訳を発表した。単純に「しみじみと」という口語訳よりも、文脈を踏まえている分だけ、かぐや姫の心情表現として、深みのある内容になっていった。

この取組みについては、「単元の中で、第1教材と第2教材、主教材や補助教材などの編成や構成、教師による説明や情報の与え方を工夫する」ことを意識し、第1時に5人の貴公子と帝との比較を行わせていることが重要であった。

教科書では、本文の前にリード文があるが、次の通りである。

「かぐや姫の評判を聞いて、五人の貴公子が求婚した。姫は結婚の条件としてそれぞれに難題を与えるが、五人とも要求された品々を手に入れることができなかった。姫は、また、帝の出仕の求めにも応じない。やがて、八月十五日、姫を迎えに天上からの使いの者がやって来た。」

リード文からも本文からも、教科書掲載部分だけでは、かぐや姫と帝の関係性が見えてこず、帝に対する「あはれ」の感情がどのようなものかを想像させることが難しい。授業では作品全体を扱うことは困難であり、どうしても切り取られた一部分の取り扱いになってしまうが、文脈把握させるための工夫を行い、その中で語彙獲得の場を設定することが重要であろう。文脈に応じた訳ができることで大学入試問題（出口段階）に対応する力にもつながるものと思われる。しかし、できればその先で、最終的には「あはれ」は「あはれ」でしか表現できないという感覚にまで到達させたい。古典の言葉そのものを自らのものとして体得するという感覚を得られることも、古典に「親しむ」ということの一つではないだろうか。

イ　思考の場を取り入れた授業について（第6時）

教科書掲載部分のみではなく、『竹取物語』という作品が投げかけている問題領域を考えさせるために、「もの思ひ」を踏まえて「きた

なき所」を考察するための授業を行った。

まず、天人の人間世界への評価が「きたなき所」であることを抜き出させた。どのような点が「きたなき所」なのかを考えるために天人世界と人間世界の比較を行い、「死」の有無と「物思ひ」の有無が二つの世界の違いであることを本文から押さえた。そのうえで、視点を変え、『竹取物語』という作品は人間世界をどのように評価しているかを考えさせた。かぐや姫が月に帰りたがらない点などから、人間世界を肯定的に評価しているとした。そして最後に、授業全体を通じて、自分自身は人間世界を「きたなき所」と考えるかどうかの意見文を書かせた。

36名の生徒のうち、34名が「きたなき所」ではないという意見、2名が「きたなき所」であるという意見であった。人間世界を肯定的に評価する者、天人世界を否定的に捉える者が多数を占めた。反省点としては、問いの方法を工夫する必要があったと考えている。授業の展開の中で、人間世界を肯定的に捉える方向性に向けてしまった感がある。意見が一方向的になるのではなく、多様な意見が出やすい展開を考えるべきであった。例えば「穢れ」のない人間の理想世界として描かれている天人世界についての説明を行うなどして、生徒に人間世界と天人世界の評価について「葛藤」を引き起こすような取り組みをしていれば、より面白い内容になったと思う。授業の山場としての「問い」の仕掛け方については、今後も検討したい。

以下に生徒の意見を大まかに分類する。

Ⅰ　きたなき所ではない（命の有限性）

・私は人間界を汚き所ではないと思います。なぜかというと理由は二つあります。一つめは命に限りがあるということです。そして二つめは人を思うことができることとです。これら二つが本文で重要になっていました。命があって限りがあれば出来ることも限られると思います。限りがあるから人を思ったり、大切にしたりしながら生きていくのだと思います。永遠に時間があればいつでもできると思ってしまって、大切にできないと思います。〔18〕

・私は「人間界」を「きたなき所」と考えません。普段生活をする中で、感情というものがとても大切であると思うからです。世界中の人が無の状態で生活するということは、全く楽しくありません。皆といて楽しい、嬉しいや悲しい悔しいなどの何の気持ちを持たないまま死ぬことなく、ずっと生きていくことはたいくつです。生きている意味がないです。私は、ちゃんと感情を表現することができ、死という終わりのある世界に生きたいです。〔29〕

・私は人間界を「きたなき所」とは考えない。理由は、人生限りがあるからこそ、その時その時を大切にし、相手を思いやったり、他人を愛することができるから。人を思いやる心はとても大切で、全然きたないことではありません。今の世の中は人を思いやることが少ない。だから、もっと人の思いやりのある世の中になればいいと思う。〔34〕

・私は「人間界」を「きたなき所」とは思いません。理由は人間界には寿命があって限られた命だからこそ、他の人への感情や愛する人への感情をもつことができるからです。感情をもつというこ

とは自分の気持ちを相手に伝えることもできるし、相手の気持ちを知りたいと思うことだと思います。私は自分が今、生きてるんだと思えるようないろいろな感情がもてる「人間界」は「きたなき所」ではないと思いました。〔38〕

Ⅱ　きたなき所ではない（きたない感情もあるが美しい感情もある）

・確かに人間界には欲望が渦巻いていて、とてもきれいな所とは言えないかもしれないけど、翁や媼のかぐや姫への思い、帝のかぐや姫の思いなどの人をいとおしく思い、他人を思いやる心や愛などがあり、欲よりもその感情が多いと思うので、自分は人間界をきたなき所ではなくきれいな所であると思った。〔8〕

・私は「人間界」をきたなき所とは考えません。理由は、まず、様々な感情があるからこそ良い所があるからです。欲のように、嫌な面もあるけれど、「愛」を与えたり、与えられたり、別れることが悲しかったり、人を思いやる心が美しい感情だと考えるからです。また、「天人界」にはない死があるから、生きている期間に楽しむことがつめこまれていると私は思うからです。〔27〕

Ⅲ　きたなき所ではない（天人界と人間界の比較→人としての生き方）

・自分は「人間界」を「きたなき所」とは考えない。なぜなら、天人界では人間が望むような物があり、欲望のまま抑制なく何でも手に入り、結果、感情が薄く、また、皆同じようで個性がない。しかし、人間界は欲、感情があり、拙い部分もあるが、それによって個性が生まれ、それぞれ一個体ずつの魂が誇張され、それぞれの最終目標に向かって必死に努力して生きているからである。〔11〕

・私は人間界は、「きたなき所」とは考えない。理由は死というかぎりがある世界で人を愛することができ、人との別れが悲しいと思える心がもてるからだ。天人界にいたらそんな感情がもてなくなると思うと悲しい。感情がもてない人生なんて楽しくない。それなら、死があっても人間界に住みたいと思った。天人界の人もかぐや姫のように、人間界に住んだら、人間界の思いやりの心がわかると思った。〔28〕

・私は、人間界を「きたなき所」とは考えません。かぐや姫が〝月に帰りたくない〟と思うほど愛された、愛に溢れた人間は決してきたなくはないと思います。天人たちの世界と違って「死」があり、様々な感情が渦巻く人間界は、天人から見たらややこしく、面倒臭いかもしれません。五人の貴公子の欲のように、すべてがきれいな感情とは言えませんが、限りある人生を一生懸命に生きていくのも悪くないのではないかと考えたからです。〔35〕

Ⅳ　きたなき所である

・私は「人間界」を「きたなき所」であると考える。理由は、人間界には感情があるからだ。自分の欲にはどんな手をつかってでも満たそうとするし、手段を選ばないからだ。感情が数えられないくらいにたくさんの種類があり、ねたみや嫉妬なども多くてややこしい。それに死というものがあり、一生人間界にいれない。人

のことを強く想ったりすることはすばらしいが、何かあったらすぐにねたんだりするので、人間界はややこしい所だと思った。〔7〕

・私は「人間界」を「きたなき所」だと考える。なぜなら、人間にはきたない感情があるからだ。天人のいう「きたない」は嘘や欲といった自己中心的な思考ではないだろうか。しかし、同じく人間界には一途に人を想う気持ちも存在する。恋慕や慈愛といったひたむきな感情は美しいものだ。確かに「人間界」は「きたなき所」だ。けれどそこには、かぐや姫が心残りに思うだけの価値ある何かも存在していると思う。〔19〕

生徒達は「死」の有無と「物思ひ」の有無に注目しながら、それぞれ自分の観点で意見を述べている。

「現代への視点」…〔34〕
「他者への視点」…〔18〕〔38〕〔8〕〔27〕
「個性への視点」…〔11〕
「人生への視点」…〔28〕〔29〕〔35〕
「世界への視点」…〔7〕〔19〕

同じ作品を読み、同じ問いについて考えたにも関わらず、個々の生徒の観点が現れており、興味深かった。この取り組みについては、作品が投げかけている問題領域について考えさせることによって、生徒の自分自身の認識との出会いの場になったのではないかと思う。古典の授業を行う場合、授業者は、語の意味、時代的背景、文化的背景など、生徒と教材との「距離」を感じがちである。その感覚は、古典教材について生徒が「知らない」ことを教え、「知る」ことを増やすことを中心とした授業展開につながりやすい。しかし、生徒が「考える」ことを通じて自分の認識を言語化し、言葉を獲得していく機会を作ることは現代文も古典も変わりない。むしろ、生徒と教材との「距離」を踏まえて、生徒が自らの（現代の）課題を「考える」ところに「伝統的な言語文化」の学習の面白さがあるのではないだろうか。

(5) 授業を終えて

「知る」授業から「考える」授業への転換をはかることに伴い、筆者自身の教材分析の観点も転換をはかることとなり、新たな教材分析の視点を得ることができた。セミナーでは、学習指導案を2回修正したが、一つの教材にじっくりと向き合う機会をいただいたことは、大変有意義であった。生徒と教材の出会い方は授業者によるところが大きい。今後も、教材分析の観点を養い、いかに古典教材（テキスト）と生徒を向き合わせるのかということを考え、様々な仕掛けを設定していきたい。「天の羽衣」の授業を次回行う場合に試みたいことを挙げておく。

○和歌を現代詩として創作し直す。

（例）「今はとて天の羽衣着るおりぞ君をあはれと思ひいでける」を、自分が愛する者と永遠の別れをする際の詩として創作し直す。

→「天の羽衣」において、かぐや姫が和歌を詠むに至る背景や、古文単語「あはれ」の解釈などを行ったうえで、どのような心情として表現するかを工夫させる。

○作品解釈をふまえて、物語を創作する。
（例）その後の「帝」の生き方を物語に描く。
→「物思ひ」「死」がある世界に生きる「帝」の姿を工夫させる。
○問題領域を主題化し、生徒の意見が分かれると予想されるテーマについてディベートを行う。
（例）人間界を「きたなき所」だと考える／考えない。
「物思ひ」があるほうが良い／悪い。
○作品が投げかけている問題領域についての意見文を書かせる。
（例）『竹取物語』を学習して、人間世界をどう考えるか。

4　おわりに

中学校と高校の大きな差は、古典を原文で読めるようにしていく過程に表れてくる。単に本文の内容に触れて「親しむ」だけで行われる。どの程度「読む」ことができればよいのかを判断する一つの基準が大学入試問題ということになるだろう。しかし、大学入試に対応するための問題演習や訓詁注釈的な授業のあり方、「入試対策の授業を行う」か「教育の理想を求める授業を行うか」かといったダブルスタンダードのような現場のあり方には疑問を感じている。「読む」ことの本質は、テキストと向かい合い思索していく中で培われる力であり、それさえ身に付けていれば大学入試にも対応する力は養われるだろう。

今回の実践は、毎時間「問い」を設定し、それについての思索の場を作ろうとした試みである。古典教材を「読む」ことができる力を身に付けさせるためには、高校の入口から出口までの3年間で生徒達が出会う教材をしっかりと選び、どの時期に、どういった「問い」をめぐる場を設定していくかが重要になってくるだろう。

（広島県立広島皆実高等学校）

引用・参考文献

○『中学校・高等学校国語科教育法研究』第二章第五節中学校国語科における〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の学習指導（東洋館出版社　２０１３）
○平成十七年度高等学校教育課程実施状況調査　教科・科目別分析と改善点（国語・国語総合）（国立国語教育政策研究所　２００７）
○高等学校学習指導要領「国語」（文部科学省　２００９）